

フィールドワーク 心得帖

第29回 武内進一

アフリカでの フィールドワークから 思うこと

大学を卒業してすぐアジ研に入所したのが一九八六年だった。中部アフリカの仏語圏諸国

フリカでの調査を通じて考えたことを書き連ねておきたい。

*

は担当者がいらないから、そこをやりなさいと言われ、右も左もわからないままアフリカ中央部について勉強することになった。それからもう四半世紀になる。コンゴ民主共和国、コンゴ共和国、ガボン、ルワンダ、ブルンジ、といった国々で、少しずつ調査を重ねてきた。農家の庭先で、都市のオフィスで、地方の役場で、あるいは刑務所で、いろんな人々に様々な話を聞いてきた。人々はこちらの稚拙な質問におおむね快く答えてくれ、多くを学ばせてもらった。

私にとって、アフリカに長期滞在するチャンスは今まで一度しかなかった。一九九二〜九四年に海外派遣でコンゴ共和国とガボンに滞在した時である。この時私は、主食食料の生産・流通を研究テーマに掲げてアフリカに赴任した。滞在中はそのために市場で調査したり、村に住み込んだりした。コンゴ共和国には一年余り滞在したが、赴任直後から政情が不安定となり、遂には内戦状態になったため、任期途中で隣国のガボンに移動するはめになった。ガボンでも同じテーマで研究を続け、首都の市場や地方の村で半年ほど調査した。

光陰矢のごとし。齢五〇に達した今、自分のフィールドワークを振り返ると、反省することばかりだ。「心得帖」で偉そうなことを言えるほど立派な仕事をしてきたとは思えないが、ア

コンゴ共和国とガボンでの住み込み調査は、その後アフリカ研究を続けていく上でとてもよい経験になった。村で暮らしていると、調査テーマに直接関係がなくても、人々の生活について様々なことに気づかされる。女性の実によく働かし、人々は盛んに呪術の話をする。泥棒の嫌疑をかけられた若者が、寄つてたかつて殴られる。生活のディテールが自分のなかに蓄積されると、一定の条件のもとで何が起るのか、ある程度想像できるようになる。二つの国で体得した知識は、他地域との比較や理論の検討など、様々な局面で役に立った。

この間、コンゴ共和国で京都大学の霊長類研究者と知り合いになったことは、自分にとってとてもラッキーだった。アフリカの村に住むことは、初心者にはそれなりにハードルが高い。体が弱く、学生時代に登山やキャンプの経験もなかった私は、どのように調査を行うべきかなかなか踏み切りがつかなかった。

究の拠点でもあったが、政情不安のため移動を余儀なくされたのである。この点は私も同じで、コンゴ共和国に赴任したのは、ザイルで調査できないからという消極的な理由であった。「我々は『研究難民』だね」と自嘲したものだ。それでも彼らの仕事を間近で見ることができたのは、得がたい経験となった。

当時コンゴ共和国には、隣国のコンゴ民主共和国（旧ザイル）での調査を予定していた京都大学の霊長類研究者がたくさんいた。アフリカ最大の熱帯雨林を擁するザイルは霊長類研

私の農村調査など霊長類研究者や人類学者に比べれば取るに足らないが、短期間であってもコンゴ共和国やガボンの村に住むことができたのは、こうした知識があつたことだった。この時期に出会った霊長類研究者の友人たちには、心から感謝し

近年は、アフリカの国家をめぐる問題に関心を持っている。主著として、『現代アフリカの紛争と国家—ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』（明石書店、2009年）がある。

ている。

＊

武力紛争にもなう政情不安のため、コンゴ共和国では二度にわたって避難を余儀なくされ、結局任期を半年以上残して出国せざるを得なかった。これは全くの想定外だった。コンゴ共和国の内戦状態は長引き、調査再開の見込みはなかなか立たなかった。加えて、紛争問題をきちんと勉強したいという気持ちで自分のなかで強まり、思い切って研究テーマを変えることにした。

それにもなう調査地をルワンダにシフトした。ルワンダは、一九九〇年代前半に凄惨な内戦と虐殺を経験していたが、一九九〇年代後半には何とか調査可能な治安状況になっていた。ただし、紛争問題を正面に掲げての調査は難しいと考え、土地を調査課題に据えて、そこから政治や紛争の問題にアプローチする方法をとった。

それ以来一〇年以上、ルワンダを対象に調査を続けている。基本的に二つの調査地を毎年訪問し、おおむね同じ人々に話を聞いて、経年での変化を観察するというやり方である。それぞ

れの調査地で約二五世帯ずつ抽出し、それらの世帯を中心に耕作地の計測や定期的なインタビューを行った。深刻な紛争を経験した社会がその後どのような変化しているのかを知ることが問題意識の根にあるが、毎年テーマを決めて、それについて突っ込んだ質問をするというやり方を取っている。

こうした調査方法は、私が抱える制約条件に規定されている。日本をベースにしているため長期滞在ができないし、大規模なデータ収集を実施する予算もない。自分のできることを考えると、とにかく毎年、定期的に来て話を聞く、ということしかなかった。一回の滞在期間は短くとも継続的に調査することで、データの信頼性を高めようとしたわけである。こうしたやり方で、農業経営、土地所有、内戦時の経験、内戦後の状況などについて聞き取りを重ねてきた。

同じ人物に様々な角度からインタビューし、その人物に関する情報が蓄積されるにつれ、回答に含まれる様々なニュアンスが理解できるようになる。人々がある問いに同じ答えを返して

も、その意味内容は時として大きく異なる。これは、特に社会的亀裂が激しいところで調査する際、留意すべきことである。ルワンダでは、紛争のなかでエスニシティが政治化され、結果としてトウチを標的とした大虐殺が起こった。エスニックな差異はその意味で重要な、しかし把握しにくい情報である。現政権はエスニックな差異の表出をタブー視しているし、そもそもインタビューの際に「あなたはトウチか、フトウか？」といった質問をすることは倫理的に問題がある。

そうした制約のなかで、様々な角度からインタビューするやり方は有効だった。この方法によつて、エスニシティを含めた回答者の人生経験が徐々に理解でき、それによつて彼らの答えに含まれる多様なニュアンスが汲み取れるようになったと思う。

＊

自分のフィールドワークの経験を成功譚として語るつもりは毛頭ない。コンゴ共和国での調査が中途半端で終わったうえに、その後研究テーマを変えたため、主食食料の生産・流通という当初のテーマは十分掘り下

げられずに終わった。ルワンダでの調査対象の規模は小さいし、長期滞在ができないため言語習得は未だ初歩的な水準に留まっている。コンゴ共和国滞在中にどの程度話せるようになった現地語（リンガラ語）は、ガボンやルワンダでは使用されていない。ずいぶんと回り道をしたようにも思う。

その一方で、仕方がなかったよな、という気持ちもある。コンゴ共和国で目の当たりにした紛争は自分の深いところに衝撃を与え、それを無視して主食食料の研究だけに専念することはできなかった。何を研究対象とするかは、生き方に関わる問題だ。紛争問題に研究テーマを変えたことは、その意味で必然だったと考えている。

フィールドワークには設計が必要だ。しかし、実際にやってみると、想定と大きく異なる現実と直面することが多い。その現実はどう対応するかによつて、研究—ひいては研究者人生—は大きく分かれることになる。手本はどこにもない。結局のところ、その時その時にベストを尽くすしかないのだらう。